

<疎外>と<ヒューマニズム> : 戴厚英「人間よ!」をめぐって

大石, 智良

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

53

(開始ページ / Start Page)

125

(終了ページ / End Page)

145

(発行年 / Year)

1985-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00005330>

〈疎外〉と〈ヒューマニズム〉

——戴厚英『人間よ!』をめぐって——

大石智良

はじめ、これがそれほど危険な小説とは思わなかった。私はただひたすら感動しただけだ。

女流作家戴厚英の長篇小説『人間よ!』(原題『人啊、人!』一九八〇年十一月刊)をはじめて読んだのは、去年の夏、ハルビンにある黒龍江大学に遊学中のことであった。まずは、大胆な人物形象とサスペンスに富んだ叙述が新鮮なおどろきであった。そのうちに、全篇をつらぬくテーマが圧倒的な重量感をもって迫ってくる。そして、息づまるような切迫した文体が、そのテーマととりくむ作者の息づかいにほかならぬことに気づくのだ。私はたちまち作品世界にひきずりこまれ、興奮のうちに、一気に読み終えた。解放後の作品ではかつてなかったことである。この作品は、一九五七年の『反右派闘争』以後、文革期にかけてあらわになった中国社会の病理を、知識人の立場から徹底的にあばき出している点で、他に類を見ないと思う。そしてそのリアリティー(説得力)は、何よりもその病理が自己暴露的に描きだされていることによって保証されている。この作品が幹部と知識人の病根をさぐりあててこれを断つといった激しい意志を、その痛みとともに感じさせるのも、それが自己解剖だからである。

ヒロイン孫悦の自己解剖は作者自身のそれに通じる。小説の主な登場人物は十一人、そのうち八人が作者(一九三八年生)と同じ四十代。すなわち、一九五七年以後の歴史の一端をにない、したがってその責任をひきうけつつ、今後は中堅として歩みださぬばならない世代である。この世代が、いま新たにスタートラインにつくためには、それなりに必要な手続があるはずだ。作者にとって、その必要不可欠な手続がこの小説であったといつてよい。「人

間を食った」との自己暴露があつてはじめて、「まっとうな人間」(魯迅『狂人日記』)をめざすことができるだろう。その容易ならざる手続を作者はこの小説で果しているのである。私の感動はまずそこに発している。

この小説は、男と女の物語としても成功していると思う。ひとりの女をふたりの男が愛するという設定、そしてそれぞれが見せる愛憎の心理模様、といえば、古典的なメロドラマである。この作品はそのような大衆性を多分にもちあわせていて、それがロマンとしてのおもしろさを構成し、ともすると観念的になりやすいテーマをほどよく肉体化しているのである。しかし、これを単なるメロドラマとして読むことができないのは、三人の男女がそれぞれに時代のテーマとま正面から取りくんできているからであり、三者三様の愛と思想のありように、革命中国の各時代の相があまりに色濃く影を落しているからである。

文革収束後の現在の相のうえに、一九五七年と文革期の相が重なり、三者の愛と思想の糸が解きほぐしがたいほどに複雑にもつれあう。これが全篇にわたるふたつのサスペンス——すなわち、五七年当時、三者のあいだになにが起っていたのかという過去の真相をめぐるサスペンスと、三者の愛と思想の結末はどうなるのかという未来についてのを生みだす。そしてそれが解き明かされる過程で、幹部と知識人社会の真相が徐々に浮かびあがってくる仕かけなのである。

作者はその複雑な世界を、『意識の流れ』の方法をとりいれ、主な登場人物十一人全員の告白体を用いて、立体的に構成している。大胆な試みであるが、斬新なその手法が彼女の問題意識にマッチして、破綻なく、相当の成功をおさめていると思う。『意識の流れ』の方法は、王蒙はじめ、すでに少からぬ作家が採用している。複数の人物の告白体というスタイルも斬凡の『公開されたラブレター』(公開的情書)など、先行する作品がないわけではない。しかし、『人間よ!』ほど事件の叙述と心理の描写がひとつに溶けあい、それだけ読者をひきこむ力をそなえた作品はなかったのではないだろうか。

もっとも、この作品にひとつだけ物足りぬものがあつたのも否めない。もうひとりの主人公何荆夫の形象がいささかりアリティー(現実性)に欠けるのだ。彼が中国革命再生の条件として訴える『最も徹底的なヒューマニズム』

としてのマルクス主義も、そのイメージがいまひとつあいまいで、食い足りないという不満が残った。

ところが、秋になって、私がこれを再読している最中、突如として、この小説が当局者の『批判』の槍玉にあがったのである。それも、『精神汚染』などというおぞましいレッテルをはられて。どうやら、ヒューマニズムを根幹に据えたマルクス主義解釈が当局の忌むところとなつたらしい。そこで私はこのヒューマニズムに着目することにした。孫悦にくらべて毒のない、ひどく甘い形象と見えた何荆夫が、当局の怒りをかうような、どんな危険性をはらんでいるのか。中国社会は、そのヒューマニズムによって、いったいなにを撃たれているのか。

そんな問題意識をもって再読したとき、あらためて見出されたのは、中国社会がかかえる〈疎外〉現象の深刻さであり、何荆夫の〈ヒューマニズム〉はその淵の底から打ちあげられた幻想であつたこと。そして孫悦の自己解剖が、〈疎外〉現象の淵の底にあつて、〈ヒューマニズム〉の幻想をささえる営みにほかならず、しかもその営みが、〈ヒューマニズム〉の幻想に導かれてはじめて〈疎外〉からの自己回復にいたるといふ構図であつた。〈疎外〉といい〈ヒューマニズム〉といい、文革後に論壇でクローズアップされた新しいテーマであるが、それが新進の一流作家の文学的営為によって、現代中国のかかえる課題にいとむ、新しい人間像にまで高められていたわけである。私は遊学中に、この小説の読者が、大学の内外を問わずいたるところに存在し、『人間よ！』熱々とよばれるブームをまきおこしていることを知つた。それは作者の文学的営為とそれが生みだした人間像が、時代のテーマと十分に斬り結んでいることに對する、青年たちの熱い共感にほかならないと思う。

以下は、作品の紹介および現代中国における〈疎外〉と〈ヒューマニズム〉についての若干の覚え書きである。

1

導入部の現在における男女三人は、それぞれがまったく孤立した世界にいる。

趙振環は一地方紙の社会部の記者である。四十四歳の誕生パーティーのあつた翌朝、かれは洪水のなかをただよひ流れる少女の夢を見た。へおれは少女を知っている。いや、知りつくしている。そして彼女を愛しているのだ。

おれは少女に追いついて、おれの心を伝えなければならぬ。……上流から不意に溺死した牛が流れてきて、おれの頭めがけてつっこんできた。おれはぞっとした。あまりの気味悪さに、あわてて右によった。と、何かがぶつかって、おれの両足にからまった。力がいっぺんにぬけてしまった。もう、泳げない。少女は見るまに速くへ流れていく……。おれは大声で泣きだした。彼女を失うわけにはいかなんだい！

その時、耳もとで女の声があった。「また悲しい夢を見たのね」。文革のさなかに孫悦と別れて結婚した第二の妻である。彼女は文革期には「造反」労働者であった。趙は彼女に当初から愛情を感じてなどいなかった。結婚は彼女が単身赴任の彼に近づいてきたのを身ごもらせてしまったためにすぎない。

趙はいま、別れた妻への慕情をつのらせる一方、遅すぎた後悔と絶望にさいなまれつつ日を送っている。四十の坂を越したばかりというのに、髪はすでにまっ白である。そんな彼に、妻がいう。「あなた、後悔してるんでしょ。あのころは労働者がもてはやされていたし、あなただってあたしに一目おいてたわよね。今はあなたたちインテリがもてはやされている。あなたはもちろん、こんどは孫悦のほうがよくなったってわけよ」。これに対して、趙はいうべきことはをもたない。この結婚生活も破局は時間の問題である。その日、趙の見た夢は、過去の絶望と将来の模索を象徴しているようだ。

一方、別れた妻の孫悦は、いま、たしかかな心の抛り所がなくて苦しんでいる。彼女は、へいつの日か、一本の力強い、大きな手が突然、私をつかまえて、「おまえの居場所はどこだ、いつまでもフワフワとただよってはいはならない」と命じてくれるのを待ち望んでいる。そして、その大きな手の夢を見たりするのだ。

またしても夢であるが、それは登場人物の置かれた心理の位相をシンボライズするために、作者が意識的に取った方法である。孫悦のみた夢は一見、典型的なシンデレラ・コンプレックスを示しているようにみえる。まさしくそうにちがいないのだが、彼女の場合、自分にシンデレラ・イメージをいだくには、あまりに重い過去をひきずっている。いや、そんな過去だったことに気づいてしまっているのである。

孫悦はいま、ある大学の中文文学部の党総支部書記をつとめている。この大学は彼女の出身校であり、一九五七年

以後の事件の舞台である。彼女の上には、大学党委書記の奚流がいる。彼は文革期には「造反」派の集會にひき出されたクチだが、今は復権をとげている。学生時代の孫悦が見た彼は、素朴で品行方正、教職員と学生に対して周到な思いやりを示す人格者であった。だから文革期に「奚流の情婦」とたたかれながら、ともに「批判」に耐えてきた。奚流もそれを忘れず、自分の復権とともに、彼女をいまの地位に抜てきしたのだ。だが、孫悦の眼に、奚流はいまや、「過去に功あり、十年の苦しみのち、いまわが手に権あり」という、権力の亡者になりはてている。

友人のひとりには、孫悦が苦しむ姿を見て、しきりに縁談をもちこんでくる。そして、「あなたが過去の不幸と苦痛をすっかり忘れてしまって、一から出なおせるように。それだけなのよ、私が考えているのは」と熱心に説くのだが、これに対して孫悦はこう答えるのだ。「だけど、私には、歴史は過ぎ去ってしまったものではないの。歴史と現実がひとつのおなかを共有している。そしてそのおなが私の未来のみこんでしまっているのよ」。導入からして、ぞくぞくするようなサスペンスに満ちており、同時に文革後の時代相のいくつかの断面が適確にとらえられているのではないだろうか。そこへ、何荆夫が遠い過去のかなたから亡霊のごとくあらわれ、さらにサスペンスをもちあげるのだ。

何荆夫は、まだ中文学部の学生だった五七年当時、「右派」として放校処分に出い、最近、二十余年ぶりに名誉を回復して大学に呼びもどされたのであった。学部の彼との最初の話し合いは、孫悦があたった。この時、彼は資料室ではたらくことを希望し、『マルクス主義とヒューマニズム』と題して一書を著す計画を明らかにする。「なんですって?」と孫悦。

「え? タブーだとも? ブルジョアジーと修正主義が使い古したお題目だとも?」何荆夫が反問する。

「私にはわかりません。お書きになったらしいでしょう。ご成功を祈ります」

この話しあい、何荆夫は、どちらのいい方も冷いもので、挑戦的なニュアンスを帯びていた、と感ずる。へだたが、いったいどんな方法があろう。災難につぐ災難が人間関係と人の心をすっかりばらばらにうち砕いてしまったのだ。ひとりひとりがあらためて自分と他人とを、そしてすべてを見直さなければならぬのだ」とも。

ふたりの会話の裏には、二十余年前の共通の記憶が伏在している。当時、何荆夫は孫悦より一級上の学生であった。彼には孫悦が趙振環と幼なじみで、つとに相愛の仲であることはわかっていた。しかし、初対面のときから彼女に魅かれ、やがて、その愛は、孫悦と共演した演劇『おまえの鞭を捨てよ』の舞台上で、父親役を演ずる自分の立場を忘れ、「孫悦！」と叫んでしまふほどに深まる。ふたりにとつて運命的な事件がもちあがつたのは、それから間もない五七年春のことであった。帰国華僑の一学生が、異国で病む母親を見舞うために出国を申請した。これを党委書記の奚流が認めず、ブルジョアの母親と一線を画せと警告したのである。このとき、何荆夫は大字報を書き、奚流に、「人間味」を發揮して出国を認めよ、と訴えた。孫悦もこれを支持して大字報に連署したものの、日ならずして、「立場を失っていた」と自己批判してしまう。何荆夫は、彼女が組織から意見されたのだと推測した。やがて彼は、「右派」と断罪された。罪名は、「ブルジョアの人間性論によって党の階級路線に反対し、修正主義的ヒューマニズムによって階級闘争を否定し、デマと中傷によって党の指導を攻撃した」というものであった。

いま何荆夫がものしようとしている本が、この事件と直接かわることは明らかである。彼は当時タブーとなっていたテーマを二十余年にわたってあたためつづけていたわけだ。「なんですって?」と孫悦がおどろきの問いを發したのは、過去の事件の記憶が呼びさまされたからだけではなかったであろう。

しかし、ふたりの共通の記憶の核にあるのは、この事件そのものではない。それを背景としてふたりのあいだに起つたプライベートな小事件こそが、さらに重い意味をもち、全篇のテーマと深くかわるのである。

2

ふたりに起つた小事件は、はじめ何荆夫の側から描かれる。

彼が「右派」と断罪されて間もなく、押収された日記の抜粋が暴露された。そこに『おまえの鞭を捨てよ』に出演した時の心情を記した、次の部分が含まれていた。へそのとき、おれはどんなにおまえの切れ長の眼に接吻したかったことか! 物言う眼よ!〜 そこには赤のアンダーラインがひかれ、かたわらに「このあつかましき」と書

きこまれていた。何荆夫にしてみれば、それは「美が醜に変わり、愛が冒瀆に変わった」としかいいようがない。かれはショックを受け、孫悦に弁明するために、ふたりだけで会うチャンスをさがした。ある晩、ひとりでキャンパスの片すみを徘徊している彼女に出会って、彼はいった。「ほくは自分をなぐさめたかっただけで、きみを冒瀆しようと思つたわけじゃないんだ」。彼女の顔は涙でぬれていた。「私はあなたを恨むわ。そして私自身を恨むわ!」彼女の小さな声はわなないていた。不意に彼の額に接吻の感触があった。彼はあっけにとられた。そして我にかえったとき、彼女の姿はなかった。

孫悦の不可解な行動は、いったいなにを意味するのか。何荆夫の大字報から日記の暴露にいたる過程で、彼女に果してなにが起つていたのか。これが、前述した、過去の真相についてのサスペンスを構成する核である。そしてそれは、何荆夫が大学にもどつてから間もないある日、趙振環から「孫悦、許してくれ!」と訴える手紙が届いた時に、彼女の脳裏にありありとよみがえるのである。少し長くなるが、問題の箇所を訳出しておこう。

へはじめて出あつた時から、私は彼（何荆夫）に心ひかれた。趙振環のようなハンサムではなかったけれど、彼の眼は、趙振環の美貌さえも、すっかり色あせてしまうほどのものがあつた。その眼は、どんなに愚鈍な学生にも、「神采」といふことばの意味を正確にわからせてくれるだろう。ほかならぬその眼が私を追いかけてきた。ふたつの火玉のように、ふたつの灯のように。私はそれから逃れるすべをもたなかった。

へあの『おまえの鞭を捨てよ』の公演の時だった。私は、なにごともないように見えた地面の下を、燃えあがる炎が流れているのを発見して、突然、いまなにが起つていのかを意識した。自分を失わぬために、私はどれだけ努力しなければならなかったことだろう! 私はこわくなって、彼から遠ざかった。彼はあまりに私をひきつける。このままでは、私は幼なじみの恋人を捨ててしまふそうだ。それでは、自分の誓いにそむき、江東の故郷にも顔むけできなくなつてしまふ。そこで私は、自分と趙振環の恋愛関係をおおびらにすることにした。彼の眼のままで、趙振環の腕を取つて見せたりもした。私は趙振環の人並すぐれた美貌と格別にやさしい思いやりによって、自分をなぐさめ、勇気をふるいたたせた。そうして辛うじて彼の誘惑をふり払つた。

へところが、彼の日記が暴露された。私をこんなにまで愛してくれた人が、他にあっただろうか。あのとき、私はどんなに、それを一字一句写しておきたかったことだろう！

その日から毎晩、私は趙振環を避け、この灌木の茂みのなかで彼を待った。彼と約束があったわけではなかったが、会えると信じたのだ。私は彼にこう言いたかったのだ。人に嘲笑されてもいい、侮辱されてもかまわない！私はあなたの心を受け容れます。あなたも私の心を受け取ってほしい、と。その日、私は彼と出あった。彼が私の正面に立ち、ふたつの明るい灯が私の心にもつすぐに射しこんだ。私は思わず……。そのときだ。「裏切りだ！二重の裏切りだ！ 恋人を裏切り、党を裏切った！」なに者が私に叫ぶのが聞えたようだった。私はびっくりして逃げだした。

へその日から、私は彼を忘れようと努めた。彼は「右派」、私は「左派」だ、どうして愛しあったりできるだろう。しかし、私は結局、彼を忘れたのだろうか。自分にもわからない。あたかも、妖怪をびんのなかにとじこめたら二度とふたとれられないように、私は自分の魂を探ることができなかったのだ……

孫悦が真に愛したのは、周囲からつとに相愛の仲と思われていた（そうよそおわれていた）趙振環ではなく、何判夫であった。彼女は結局、その愛をみずから裏切ってしまったが、重大なのはそのとき彼女の心裏に動いたものである。彼女の聞いた「二重の裏切り」の声のひとつは、すでに明らかのように、伝統的な貞の観念である。それは共同体の規範として解放後も変わらず生きており、若い世代をさえ拘束する力をもちつづけていたわけだ。孫悦の愛情の真実はその力のまえに屈したのである。

もうひとつの「裏切り」の声は、いうまでもなく、党の権威が思想を、さらに愛情関係をさえ左右するほどの力をもっていたことを示すものである。「反右派闘争」の後、「向党交心」という運動があった。党に向かって心を交（まじ）せる、すなわち、党に絶対忠誠を誓う運動である。このとき、孫悦は何判夫とのいきさつを告白して、「階級闘争のなかから教訓を汲み取った」と、共青团の組織にはめられるのである。彼女の愛と思想は、忠の観念のまえにも屈したといわなければならない。そしてその忠誠心は、党に対する絶対的な信頼感にさええられるとともに、

さらに、その域を越えて党を偶像化し、これにひれ伏さずにはられない畏れの感情にも支配されていたといつてよい。ちなみに、このシチュエーションは、『人間よ!』より一年早く書かれた魯彦周の『天雲山伝奇』と共通するものがある。そのヒロインは、恋人が「右派」のレットルをはられたとき、なぜ「右派」と判断されたのかさえ問うことなく、恋人と縁を切っている。孫悦だけが特殊だったわけではないのである。

貞にしろ忠にしろ、これを一概に否定することはできない。しかし、それが内発的なものに支えられぬかぎり、形がいに堕し、時に人間にとって桎梏と化すのはいうまでもない。孫悦の場合は、貞と忠のために、自分の愛と思想への裏切り、すなわち二重の自己欺瞞におちいるという、高価な代償を払わねばならなかった。そしてその自己欺瞞は、当時、中国社会に普遍的に存在した人間疎外の性格を描破しているのではないかと思う。作者は作中において、疎外ということばこそ使っていないが、それは十分に意識していて、文革後の孫悦に次のように語らせている。

「敬虔な修道女が、神は自分の造りだしたものと気づいたら、狂わずにはいられないだろうか?」

修道女はいうまでもなく、孫悦自身であり、神は貞と忠の対象、すなわち趙振環が代表する共同体と溪流が代表する党である。そして彼女は、いま、文革を通じて貞と忠の対象の無惨な内幕がさらけだされたことに打ちのめされている。しかも、それを美化し、神格化した底に、自身の二重の自己欺瞞があったこと、そしてそれが自身の運命のみならず、何荆夫の運命にかかわることだったと気づいたとき、ほとんど自己崩壊といてよい状態におちいった。「自分が党員に値しなくなったような感じ」と彼女がいうのは、そのことを指している。それは、魯迅の『狂人日記』の主人公が、おれも人を食ったかもしれぬと気づいたとき、自分の正義の立場が崩壊して「考えられなくなった」と同質のものである。

なんらかの社会的変動によって、それまで正しいと信じてきた対象が崩れたなら、その人間の精神世界も崩壊して当然である。ところが、魂に触れる革命「とうたわれた文革の時期に、世界がくつがえるような崩壊感覚を描きこんだ作品はついで現れなかったように思う。私にはそれが長いあいだの疑問であったが、そのような作品が文

革の収束を待つてはじめて現れたわけである。その意味では、真の文化革命は、文革収束後に芽吹いたというべきかもしれない。

さて、こうしてふたりの過去の真相が明らかにされるとともに、必然的に新しい重大なテーマがクローズアップされる。崩壊の自覚はとりもなおさず権威からの解放であり、疎外からの人間回復の第一歩である。そしてその第一歩をあゆみだしたとき、孫悦の自己回復のテーマは何荆夫のヒューマニズムと交わりはじめ、その行く末がもうひとつのサスペンスを構成する核となってゆくのである。

3

次に、何荆夫のヒューマニズムの中身を検討しておこう。すでに見たように、彼にとってヒューマニズムの問題は、五七年の事件にはじまる。以来、二十余年にわたって、「マルクス主義とヒューマニズム」が片時も手ばなせぬテーマとなったのである。それがどのように展開されたかは、たとえば、彼が流浪中に出会った中学時代の教師との会話によって、その一端をうかがうことができる。この教師もやはり、五七年に、学生にヴィクトル・ユーゴーの『九三年』を紹介したことが「反動的ヒューマニズムの宣揚」と見なされ、*「極右」*のレッテルをはられたのであった。ふたりの会話はその『九三年』の問題からはじまる。

「きみ、読んだかね？」

「ええ、大学で読みました。革命と反革命がいざ決戦というときに、ユーゴーは闘いを調停し、人間の天性によって階級矛盾を解決しようと考えたのですね。それは幻想でしかあり得ません。革命軍の將軍ゴーエンが反革命がわの大おじを逃がしてやったのはたしかに犯罪です」

先生は、それではユーゴーの理想は一文の値打もないのかと反問する。これに対して何荆夫は、ユーゴーの提起した問題はおもしろいが、その理想は資本主義社会では虚偽でしかあり得ない、と答える。

「しかし、プロレタリアはそれを真実に変えることができるだろうか？」

「できると思います、先生。私たち共産主義者は全人類の解放をめざしているのじゃありませんか。マルクスはいっています。〃無神論は宗教の止揚に媒介されて自己表現されたヒューマニズムであり、共産主義は私有財産の止揚に媒介されて自己実現されるヒューマニズムである〃〃無神論の博愛は最初はただ哲学的なものにすぎないが、共産主義の博愛は、初めから現実的なもので、直接、実効を追求するものである〃。マルクスは、ブルジョアのヒューマニズムとプロレタリアのヒューマニズムに一線を画していますが、ヒューマニズムと博愛そのものを否定してはいません」

何荆夫の引用したマルクスの言は、いうまでもなく、『経済学・哲学手稿』のそれである。かれの哲学的探求は初期のマルクスにまで及んでいたわけである。初期マルクスの再検討は、実は文革収束後のひとつの流行であり、ヒューマニズムと疎外概念の積極的な再評価が論壇にひとつの流れを形成するほどの勢いであった。何荆夫のヒューマニズムもその流れに属するものといつてよく、彼の見方は、文革後の論客のひとり汝信の「マルクス主義は最も徹底的なヒューマニズム」というとらえかたと軌を一にするものである。ちなみに汝信論文は、『人民日報』賞一九八〇年度受賞作の一篇に選ばれたもので、それは当時、初期マルクスとヒューマニズムの再評価が市民権を得ており、論壇に清新な風を吹きこんでいたことを物語っている。いうまでもなく、この流れは、五七年以来のいわゆる〃階級闘争の拡大化〃が招いた惨たんたる結果への反省を出発点としている。

何荆夫の形象は、そのような開放的な思想界の環境を反映しているのであり、その著作は、〃大躍進〃のさいに農民の美質を發揮して餓死した父への追悼の意味ももっている。

このように、何荆夫にとっては命にも等しいヒューマニズムだが、では、孫悦にとって、それはどんな意味を持っているのか。これも五七年当時から見えておこう。

彼女が、はじめ、何荆夫の大字報に署名しながら、間もなくそれを自己批判したこと、この転換に組織の〃意見〃があずかっていたらしいことはすでに見た。孫悦の回想には、何荆夫の大字報に直接触れた部分はないが、その内容とかわかる次のような一節がある。

（彼（奚流）は一度ならず私に意見したものだ。「小孫、世界観をすっかり改造しなければいけないよ。きみは十八、九世紀のブルジョア文学の影響がとて強い。プチブルのムードがあふれている。これは階級闘争のなかでは危険なことだよ！」彼の教育があったからこそ、私は自分の脳裏にひそむさまざまなブルジョア思想を深刻に自己批判したのだ。私は全学部の学生大会で、体験談として、十八、九世紀外国文学の私に与えた害毒について語った。階級闘争において確固たるものがなかったのは、ヒューマニズムと人間性論の影響であったこと、そのために、あやうく右派分子と恋におちいるところであったこと。奚流は私の自己批判を聞いて、こういつてくれた。〃……今日の自己批判はすばらしかった！彼女はこれからはきつとりっぱなプロレタリア戦士になるだろうと信じます〃。私はそれを聞いて涙をこらえることができなかった。なんてすばらしい指導者だろう！

当時、孫悦にとって、奚流の権威は絶対であった。だからこそ、その〃意見〃によって、華僑学生と何荆夫に対して、大した痛みを感じることなく自分の立場を移行できたことが読みとれる。また、彼女のヒューマニズム理解はこの程度であったから、何荆夫の大字報に共鳴した自己の喪失も、さほどの痛みとして残らなかったであろう。彼女にとって、ヒューマニズムのテーマは過去にはなく、文革後の現在に属するものである。文革期に、孫悦のなかで奚流の権威が崩れ去ったとき、華僑学生と何荆夫に対する罪の意識が生れた。そして、何荆夫との再会の席で、彼が『マルクス主義とヒューマニズム』の一書をものしっていると聞いて、「何ですって？」と驚愕の声をあげたときに、はじめて自分とかわる深刻な問題になったのである。その限りでは、孫悦はこの世代に共通の感覚を代表しているといつてよさそうだ。

しかし、孫悦はその後も、ヒューマニズムについて、直接的にはほとんどなにも語らない。ただ、何荆夫のがわから見た、次のようなやりとりがあるだけである。ある日、何荆夫が孫悦の部屋を訪れ、彼女が『九三年』を読んでいたことを知る。感想を求めると、彼女はこう答えた。

「なんと言ったらいいか、自分でもわからないけど、私はブルジョアのヒューマニズムとはもう縁を切ったのよ。いまさら、そこにもどるわけにはいかないわ」

「プロレタリアのヒューマニズムはないのだからか？」おれは熱をこめてたずねた。彼女はガバと顔を上げ、ちらりとおれを見た。その眼も熱のこもったものだった。……

「あるとも、孫悦！ マルクス・エンゲルスの著作をよく読んでみたまえ！ なんども読むうちに、ふたりの偉人の心に「人間」の二文字が大書されていることを発見するだろう。かれらの理論、かれらの革命の実践も、この「人間」を実現するため、人間を「人間」たり得なくさせているあらゆる現象とその原因を消滅するためだったんだ。残念ながら、われわれ自称マルクス主義者のある者は、かれらの手段だけをおぼえて、かれらの目的を忘れ、あるいは見失ってしまっている。まるで革命の目的が、人間の個性を消し、人間の家庭を破壊し、人間同士をさまざまの垣根で切りはなすことでもあるかのようにね。われわれは封建的、経済的等級を消滅する一方で、たくさんの政治的等級を人為的につくり出してしまった。私は黒人類、きみは九番めのはなつまみ者。われわれの子は教育すべき子女、というわけだ。まだ生れぬうちから、レットルがついている。これで唯物主義といえるだろうか？」

この対話によって、何荆夫のヒューマニズムのありようはいっそうはっきりしてくる。すなわち、彼のヒューマニズムは、中国社会における人間疎外の問題と深くかかわっているのである。これも前述したように、文革収束後の論壇の新しい潮流の特徴のひとつである。そして孫悦は、明らかに何荆夫の思想に強くひかれていく。しかし、その心は容易にひらかれない。やはり過去の罪の意識が彼女をしばっているのだ。何荆夫に対して、彼女の心がひられるには、ある場面が必要であった。そしてその場面には、趙振環と奚流が登場してこなければならぬ。

4

それは、ある意味では五七年当時の再現であった。「孫悦、許してくれ！」という手紙につづいて、趙振環本人が彼女を訪ねてきて、ここにふたたび、孫、趙、何三者の愛憎の葛藤がくりひろげられる。そこへさらに、何荆夫の『マルクス主義とヒューマニズム』の出版が、印刷の段階で、奚流の横槍のために阻止される事件が起るのである。

しかし三者は、当然のことながら、それぞれ五七年当時とはまったくちがう精神的位相のもとに登場して来る。趙振環は、再婚の妻とはすでに別居している。そして新聞社では、「魂をもたぬ道具」になりさがっていた自分。終止符を打つために、自分の意思に反した劇評を強要してくるデスクに対して、これを拒否する男になっている。彼は彼の場で、やはり自己回復の旅にのぼっていた。そして、「孫悦のところにはしか過去の自分は見出せぬ」と感じて、彼女のもとに現れたのである。

何荆夫は、彼が「悪魔に売りわたした魂」をとりもどしに来たのだと理解する。しかし、孫悦は、娘に会わせることだけはいったん承知するが、「きみの将来はほくより幸せだ、きみには何荆夫がいる」という趙のことに怒りを爆発させて、「私はあなたが嫌い！永遠に許さないわ！」と叫ぶ。彼女は何荆夫との結婚を、すでに「白紙」ではない自分が彼の「白紙」の愛を受ける資格がないと感じてあきらめ、それを何本人に告げたばかりだったのだ。ただ、孫悦にはひとつの懐疑がのこった。〈私には振環に申し訳ないところはないのだろうか？もし、はじめから何荆夫を選んでいたら……？〉 趙は、娘あての手紙を何荆夫に託して去った。

かわって奚流の登場である。

へわしにはわかっていた。こんなにまで「ゆるめ」ていったら、もう一度、「反右派闘争」をやらねばならなくなると。案の定、こんなものがとび出してきた。これは何荆夫の『マルクス主義とヒューマニズム』が印刷段階に入ったことを知った時、奚流の見せた反応であるが、その思想が二十余年前とまったく変わっていないことがわかる。彼が著書の内容のひとつひとつに示す反応は、現在の中国の問題の重要な一面を反映していて興味深いものがある。いくつか例をあげてみよう。

〈社会主義社会の階級状況は結局どうなのか、実事求是の原則によって研究する時が来ている！階級闘争を拡大化して、矛盾のすべてを階級矛盾と見なし、はては人為的に「階級闘争」を作りだす、そのすべてが我が国をどれだけ害したことか。解放後三十年にもなるのに、なぜ、敵はますます増えるのか、下々にはわからないことだ！——なんという言い草だ！これは解放以来いく度かの運動をすべて否定するものではないか！これでは、われ

われは三十年間、良いことはなにもせず、悪いことばかりしてきたことになるではないか！ 反革命分子の粛清があやまり？ 〃反右派〃があやまり？ 〃四人組〃の残党の洗い出しがあやまりだというのか。マルクス主義の学説の精髓は階級闘争だ。これではまるで、マルクス主義の旗すら投げ捨ててよいことになるではないか。

△もし人々が個性を持たなかったら、生活はどんなに単調なものとなることだろう！ 社会の進歩はまたどんなにぶくなることだろう！ 幸い歴史には、いつも、このような状況に安んぜず、さまざまに古くさい觀念にばらねぬ人たちが存在した。彼らは衆にぬきんで、新しい、独特の、強烈な個性たり得た。彼らは先んじて人々の心の声を叫び、千軍万馬をひきいて、歴史を前進させたのである。考えてもみよ、どの時代の革命者がそうでなかったか？ ……だから、われわれは独特の個性を無限に賛美するのである——まったく信じられん、こんなことが共産党員の本に書かれているとは。個性の尊重？ 個性とはなんだ？ 共産党員は党の飼いなされた道具でなければならぬ。もし、みんなが勝手に自分の観点、自分の個性を持ったら、党の路線はどうやって貫徹するんだ？

△「ここまで書くと、こんな警告がきこえてきそうだ。気をつけろ、おまえはもう危険のせとぎわに立ち、ブルジョア階級の太鼓もちになりさがっているぞ！ 友よ、心配は無用だ。私は、自分がブルジョア階級のヒューマニズムから養分を吸収していることは認める。だが、ブルジョア階級の帽子はきみにお返ししよう。ブルジョア階級のヒューマニズムは、少数者の個性を肯定し、実現するだけで、多数者は少数者のために犠牲となって、非人間的な生活強いられる。このようなヒューマニズムは疑いもなく虚偽である。しかしながら、もう一種のヒューマニズムすなわちマルクス主義のヒューマニズムがある。それは全人類を解放し、だれをも自由で独特な個人たらしめる」

「友よ、きみはマルクス主義がヒューマニズムに最も徹底的、最も革命的意義を賦与しているとは思わないか？ きみは共産主義の理想世界に到達するために、人間の天性をおさえつけ、人間の個性を殺す封建制の残りかすを掃きなければならぬとは思わないか？ それともきみは、封建的専制主義がわれわれには永遠にふさわしいと考えてでもいるのだろうか——春のようにぬくくって、とても手離せやせぬ？」——思い上った何荆夫め、わしの鼻

先に指をつきつけてのしりおる！ こちらがブルジョアといえ、やつは封建主義の帽子をかぶせてくる。反封建、反封建、こいつがまたぞろ流行だ。われわれがむかし、土豪劣紳と戦ったのこそ反封建ではないか。われわれが血を流し犠牲となって、生涯を革命にささげたのに、封建主義も打倒できなかったというのか？ でたらめな！ ……百花斉放、百家争鳴は確固たるプロレタリア階級の政策だが、ブルジョアの自由化を許すものでは絶対にならないぞ。

奚流は結局、自分の時代錯誤の信念のためと、加えて、これを出版されたら自分が責任を問われかねないとの恐れゆえに、出版の阻止を決意する。それが何荆夫のいう「封建的専制主義」であるとも知らずに。先に奚流の反応が興味深いといったのは、「精神汚染一掃」のキャンペーンの中で行われたヒューマニズム批判が、奚流の以上のような偏狭さとい通ずることだ。いわく、「マルクス主義の歪曲」「階級闘争の否定」「個人主義」「ブルジョアの自由化」……。それも整党という党内政治の動きとからめたらうに、「精神汚染」などと、問題の出どころをすべて国外と党外にもとめた無責任な呼称を与えて。これで、ヒューマニズムや疎外概念の再評価を行った論者や作家、そしてその支持者たちが疎外感を持たなかつたら、その方が不思議である。

彼らのすべての論、作品がすぐれているとは私も思わない。王若水⁽²⁾のように、なにかも疎外概念ひとつで説明しようとしても無理があるだろうし、張笑天の『離々たり原上の草』のように、あまりに荒唐無稽なヒューマニズム物語をつくっても、説得力を失うだけであろう。しかし、そうした弱点を見せながらも、新しい流れがあえてタブーに挑戦し、新たな問題を提起したことは、それなりに評価されてしかるべきではないだろうか。しかし、当局者は、それを芽のうちに摘み取ってしまう気であるようだ。ということは、それがどんなに幼くとも、やはり中国社会のなにかを撃っているからであろう。何荆夫の「マルクス主義のヒューマニズム」にしても、これまで見てきたように、いかにも甘く、食い足りないが、事情は同じである。そうでなければ、青年たちのあいだに『人間よ！』ブームをひき起こすほどの圧倒的な支持を得られはしないであろう。

では、それは中国社会のいっただいなに撃っているのであろうか。私はここで、再び魯迅の『狂人日記』を想い

起す。何荆夫の形象は「狂人」のいう「まだ人間を食ったことのない子ども」ではないかと。それは現実を裏返しただけの、すなわち、まだ現実的な根拠をもたない幻想にすぎないのである。しかし、『人間よ!』の場合も、『狂人日記』の場合と同じように、それを単なる幻想といつてすませることはできない。というのは、何荆夫という幻想が、現実における孫悦の自己解剖の作業、および、それにもとづく自己回復の営みと一体になっているからである。孫悦はまさしく『狂人日記』の「狂人」である。何荆夫のヒューマニズムは、孫悦の形象に支えられてはじめて、中国社会に存在する人間疎外の現象を撃っているといえるのである。

作中に描かれた疎外現象は、孫悦のそればかりではない。たとえば、こりかたまつた信念と権力欲のために、つねに敵を見つけて闘わずにいられない奚流自体が、疎外された人間像でなくてなんであろう。そしてそれがまた他人を疎外するのだ。いつも上司のいうがままでありながら、情勢しだいではいつでも寝返るかまえをとる大学の幹部。政治科のテキストなんて『毛糸の編み方』と同じ実用書よと、理想は捨てて現実性だけに生きる政治科担当の女教師……。彼らは五七年以後の歴史が必然的に生み出した人間像として描かれているが、いずれも中国社会における典型的な人間疎外の形象化といつてよい。そして、これらの形象は、『人間よ!』の批判者でさえ、「一定の眞実性がなくはない」と認めざるを得ないのである。

さて、それでは、奚流が出版阻止に動き出したとき、孫悦はそれをどう受けとめ、どんな行動を取ったのだろうか。

5

奚流の出版阻止の挙に、法的根拠はあり得ない。しかし彼は、党委員会をいわば法から独立した権力機構として利用し、これを実行に移すのである。彼は党委員会の席で部下に提案させ、容易に次のような党委決定を得る。

「党委の意向を出版社に伝え、彼らが聞かなければ、一切の責任を彼らに負ってもらう。何荆夫に対しては、教育を主とする。彼が自発的に原稿をひきあげ、根本的な手直しをするなら、これを歓迎する」

奚流らが何荆夫の思想を「修正主義」と決めつけたとき、孫悦はこう考える。へ荆夫のいうヒューマニズムは全人類の徹底的な解放をめざすものであり、階級的搾取と圧迫からの解放だけでなく、さまざまな精神のくびきから解放しようとするものだ。……彼は階級闘争を目的とすることに反対し、社会主義社会における階級闘争を拡大して、人民大衆が傷つけあい、分裂する事態を招くことに反対しているのだ。彼は物質からだけでなく精神的にも公民のひとりひとりを人間とみなし、彼らの権利と個性を尊重せよと要求しているのだ。いったい、どこがまちがっているのだろうか？

彼女のヒューマニズム理解が、人間解放の思想としてのそれだけでなく、基本的人権の概念に近い、個々人の法的権利の主張を含むものにまで深められていることがわかる。このとき彼女は、かつてその前に屈していた奚流に、昔日の権威はひとかけらも感じていない。ただ、きたならしい策士が人権を踏みじろうとしていると映るだけだ。そして、今の事態こそ、彼女にとって五七年問題の再現にはかならないことを意識する。へ私はかつて何荆夫をたったひとりで風雨にさらさせた。もしもう一度、同じことが彼の身にふりかかったら……？

こうして彼女は、奚流への反抗を決意し、何荆夫の観点を支持する発言をする。そして、「私情を党の原則ととりちがえることは絶対に許さない」という奚流のことばをきっかけに、自分が私的にも何荆夫を愛するものであることを公然と明かすのである。それはかつて彼女をしばっていた忠と貞の枷をふたつながらなげうち、本来の自己を取りもどした瞬間といってよい。そして彼女は奚流を直視して言うのである。

「しかし私は男女間の私情から何荆夫を弁護するものではありません。党の政策と国家の法律をつらぬくためです。たとえ、何荆夫の考え方がすべて誤りだったとしても、出版を認めないわけにはいきません。是非の判断はそれから討論を通じて行うしかありません。私自身は何荆夫の考え方に共鳴するものであることを否定しません。もし何荆夫がたしかに誤っていると事実が証明するなら、私は彼とともにその責任を取りたい、たとえその誤りがどんなに大きくとも」

自己回復をとげた彼女の、いわば闘争宣言であるが、ここに特徴的に見られるのは、彼女の個としての自覚であ

る。独立した個としての権利意識、個としての責任感、他者（何荆夫）との連帯も個の自覚のうえに立ってのそれである。黨員として「党」に属しながら、「党」から独立した人格として歩みだした魂がここに描かれている。そして彼女は、言外に、自身への痛切な反省をこめて、こう語っているかのようだ——人間は他者の道具であってはならない。今こそ個々人が人間としての尊厳をとりもどすべき時だ。独立思考のできる主体者に支えられるのであれば、マルクス主義は命を失い、党は抑圧の装置に墮するほかないと。これが彼女にとってのヒューマニズムの第一義的な意味だと思う。こうしてみると、それは独立思考と権利意識の点で、魏京生の「第五の現代化」としての民主の主張にも通じる内容をもっていることがわかる。これも若い知識人の共感を呼び、当局者の怒りを買うゆえんであろう。

さて、物語の結末を急ごう。孫悦は何荆夫に党委員会の決定を伝え、自分は出版を支持する旨を伝える。何荆夫は、党紀と国法に照らして、そのような決定はあってはならぬことと考え、孫悦にこう告げる。「私が自発的に原稿をひきあげることはあり得ない。党委にはこう伝えてほしい。私は党委の意見は誤りだと思う。私は出版社の決定を待つことにする。出版社がこのために本を出せない事態になったら、私は上級の党组织に訴えるだろう」。孫悦はそれを聞いてホッと息をつき、「あなたがそうするだろうと、私にはわかっていました」と語る。こうして、何荆夫に対するわだかまりも急速に消えてゆく。

そして終章で、彼女は趙振環あての手紙にこう書くのである。へ私があなたを許す日があるうとは思ってもみませんでした。まして、私の方こそ許しを請わなければならぬとは。……私たちの悲劇の責任をまっ先に負うべきなのは、私であってあなたではないと思います。……『マルクス主義とヒューマニズム』の出版問題によって、私は自然に荆夫と接触する機会が多くなりました。彼をただひとり嵐の中で闘わせるわけにはいきませんもの。私たちの心の堰は次第にくずれてきました。……今年の冬休みには、娘にあなたを訪ねさせます、かならず。……出版問題については、すでに上級の党委が人を派遣して、情况进行了了解してくれています。私たちは樂觀しています。……振環、私たちの以前の関係は完全に終りました。これからは、また同級生、友人です。私たちは本来こうあるべ

きだったのです」

趙振環もこれを肯う。へそうだ。おれは失うべきものを失い、取りもどすべきものを取りもどした。親愛なる娘よ、おれはおれの魂、すなわちおまえを取りもどした！」

ここに孫悦の自己回復の営みは完結した。そして彼女の自己回復は、それが妥協のない自己解剖に裏づけられているために、新たな自己の再生、創出にまで高められているというべきであらう。

ところで、孫悦の「私たちは楽観しています」ということだったが、これは作者の願望の表白にすぎないようだ。中国の作家がよく用いる手で、願望あるいは理想を現実であるかのように描く。作品が暗すぎる(そう判断される)と、社会的効果を問われて出版そのものが不可能になるため、やむを得ず取る苦肉の策だと思われる。作者が小説の「後記」にしろした次の一節こそが、作者の真の現実感覚というべきであらう。

「私はマルクス主義とヒューマニズムはあい通じ、あるいは一致すると思う。たとえマルクス主義の著作の中に理論的根拠が見つからぬとしても、私は自分の魂の声をおさえつけようとは思わない。これを批判すべしとなら、批判せよ。これはどのみち、私自身の思想、感情であり、また、自覚的にみずから求めた自己表現にはかならないのである。咎は自らに由って取り、罰せられて怨み無し」

現実の事態は、その不吉な予感どおりに推移しているのである。ちなみに、去年の九月七日付『光明日報』に載った季刊文学誌『長江』第四期の広告は、彼女の新作中篇小説の掲載を予告していた。タイトルは「死神がはばたく時」(当死神扇動翅勝的時候)。私は問題作であることを期待して待った。ところが、いくら待っても、雑誌が店頭に現れない。そのうちに『人間よ!』が批判され、雑誌発行の遅れの理由を理解したわけであるが、十二月になってようやくそれを手にしたとき、予告された彼女の作品は、ひと言のことわりもなく抹殺されていたのである。以後、彼女の作品が発表されたということを聞かない。読者としては、今のところ、抹殺された小説のタイトルに象徴的な意味を見るほかないのが実情である。

しかし、彼女は結局は敗北していないと思う。それは、張笑天は自己批判したのに、彼女はしていないというよ

うな現象的なことをいっているのではない。彼女は知識人の前途の困難さを予知しつつ、それを知識人としての存在をかけて作品化している。自身と作品が今日かくなることを、小説においてすでに予告し得たということ、これが文学者としての勝利でなくてなんであろう。たといそれがどんなに悲しむべき勝利であろうとも。

しかも彼女は決して孤立していないと思う。今年に入って、「精神汚染」のことが、中国のマスコミからほとんど姿を消した。その裏には、知識人からの反撃、あるいは否定的な反応があったことが十分に推測される。だからといって『人間よ!』批判が止んだわけではないが、この作品を支持する者が、まったくいなくなったとは考えにくい。今年一月三日、胡喬木が中共中央党校で、「ヒューマニズムと疎外の問題について」と題する、長い講演を行っている。そこでは、疎外概念の社会主義への適用を一律に誤りとする一方、ヒューマニズムは世界観・歴史観としてのそれと倫理・道徳としてのそれに分け、前者を否定、後者についてはマルクス主義にもとづく「社会主義のヒューマニズム」を肯定、賞揚している。世界観・歴史観と倫理・道徳を分けるなど二元論におちいっていると思うが、これも党内の苦しい矛盾を反映していると思われるかもしれない。

一九八四年九月十八日

注

(1) 一九八〇年八月十五日『人民日報』。「人間よ!」の定稿が成ったのも、同年八月である。なお、汝信は一九八四年一月九日から十一日にかけて『人民日報』に「ブルジョア・ヒューマニズムを批判し、社会主義ヒューマニズムを宣伝せよ」と題する論文を連載し、その中でこれまでの見方を自己批判した。

(2) 文革収束後、哲学界に疎外概念をまっ先にもちこみ、また、ヒューマニズムの再評価を熱心に支持した。当時、『人民日報』副編集長。『精神汚染一掃』キャンペーンのなかで解任された。

(3) 『学習と探索』誌一九八三年第四期「『人間よ!』の思想と芸術傾向を評す」。筆者の張綱は社会科学学院文学研究所に所属。中国当代文学研究会副会長、『作品と争鳴』誌責任者。